

今度ははっきり言えた

僕は今日見た、この八幡町の風景に、彼女の姿を、あちこちに挿入した。

「ここは、彼女が小さい時から生まれ育った町だ。」

僕は、彼女が小さい時の姿も想像した。

「どんな少女だったのだろう。」

この境内の、石畳みの道を歩いて行く、少女時代の彼女を、想像した。

そうだ、僕が小学校四年の時、お母ちゃん、お父ちゃんと僕ら兄弟四人でこの八幡の町の河原へ、水浴びに来た事があった。

帰り、「電車が混むから」と、母の言葉で、

この神社で、ラッシュが終わるまで、この境内で、皆で、休んでいた時だった！

町の子供達が、ガヤガヤ、境内の中で、遊んでいた。その時、僕は、境内を囲む石の柵にもたれて、川べりをながめていた。

そこへ、僕と同じ年くらいの女の子が、石畳みの道を、向こうから歩いてきた。

その子の下駄のカランコロンという音に、僕は振り向いた、その時、目がパッチリして、鼻筋高く、こけし人形のような髪の毛の少女が歩いて来た。